

## 毛利藩の枳菜

後 藤 忠 盛

「幕府の手厚い保護があつたにしても、家塾がどこまでも林家の家塾としてとりのこされた間に、孔子廟の方は、枳菜に関する幕府の参与と関心とを通して、一歩も二歩も官営化していった<sup>(1)</sup>」という。これは、とりもなおさず、国政の中心的支柱を儒教に求め、幕府忠誠への道を開くものであつた。

毛利藩においても、萩明倫館を創建するにおよんで、毎年春秋の二度枳菜の菜儀をおこない、また、藩内の多くの学校もまた同様であつた。もちろん、長い年月の間には、「近来いつとなく御当職方御参詣も無之随而ハ御手廻頭象参詣も無之様ニ相成以前ト違ヒ御崇敬筋薄き様ニ相見申候<sup>(2)</sup>」という状態になることもあつた。しかし、その祭儀は約百五十年の間続けられ、藩士の心の支柱としてはぐくまれてきた。

本論は、毛利藩におけるこの枳菜の様子を紹介しようとするものである。

## 一 萩明倫館

萩明倫館は享保三年（一七一八）十二月、五代藩主吉元公によって、萩堀内追廻に創建され、あくる享保四年（一七一九）正月、当役・老中・組頭らの出席のもとに開校式がおこなわれた。その広さは九四〇坪で、本門の正面に聖堂、その奥に講堂を配していた<sup>(3)</sup>。聖堂には諸士の信仰として、「孔子并顔曾子孟子四配御安置被成尊号調之儀は於江戸林大学頭殿江小倉尚斎を以御頼<sup>(4)</sup>」になり、後日安置された。さらに明倫館は、十三代藩主敬親公によって、萩江向に新しく創建されることになり、弘化三年（一八四六）十一月工をおこし、嘉永二年（一八四九）正月再建された。益田元宣を学校総奉行に、村田清風をその手元役として進められたものである。総坪数一四三四九坪、建坪二七三四坪<sup>(5)</sup>であった。

旧明倫館から新明倫館への遷座の式は、同年正月二十六日におこなわれた。その要領を摘記すると次の通りである。<sup>(6)</sup>

- 一、御名代登壇祝官相隨ひ御告文奉読御拜相済御名代退去居合諸出勤儒者舎長諸生中共惣拜
- 一、惣拜相済廟司役奠供徹之畢而新御中間之者神輿聖前之間江持出置之一應退去学頭都講役附舎長罷出木主神輿江奉納相済右之新御中間之者神輿正面之階迄持出同之白張着江渡之退去白張着請取候事
- 一、明倫館前往来留之事
- 一、御遷座相済候迄米屋丁雜賀下り新堀辺往來留之事
- 一、中之惣門より兵服町米屋丁下り順二被遊御通行五ツ半時新館御着輿之事（註御筈輿朝五ツ時）
- 一、木主御厨子奉納相済秋祭之格を以而御祭儀始ル献爵相済御名代六戸音門殿御告文奉読御祭儀無滞相済候事

明倫館の古館においては、聖壇に孔子ならびに顔回・曾子・子思・孟子の四配が祀られたが、嘉永二年（一八四九）八月の秋祭から「聖廟秋菜之節六先生從祀之儀先達而相伺候処伺之通可被仰付との御事二御座候<sup>(7)</sup>」と新たに周元公・程正公・邵康節・程純公・張明公・朱文公を祀ることにした。

明倫館では、春秋の上丁または中丁の日に秋菜をおこなったが、春の秋菜の様子を、嘉永二年以降の秋菜一件を綴った『春秋秋菜』にもとづいて要約すると次の通りである。

まず、秋菜の役付とその担当者を見ると、初献（御名代）・亜献（学頭）・終献（老儒）・講師（老儒）・御規式方（出頭衆）・典儀（儒役の内）・祝官（儒役の内）・初献介者（御書院衆）・司樽（御書院衆二人）・斉郎（御書院衆五人）・賽張者（諸生の内二人）・亜献介者（諸生の内一人）・終献介者（諸生の内一人）・爵盤者（諸生の内一人）・木工方（御作事奉行）・斉厨（御膳夫頭）であった。

また、秋菜の順序は、迎神・奠幣・進饌・初献・亜献・終献・受酢・総拝・徹供・講釈・望瘞・送神の順序でおこなわれた。

〔迎神〕賽張者二人が壇上に登り、戸内及び神龕の張をあげて木主を拝することができるようになる。つづいて、祝官が立って東側の机の上におかれた迎神詞をとり、壇に登り木主の前に跪いて、この迎神の詞を読む。

〔奠幣〕初献介者、盥洗所に入る。初献者もまた盥洗所に行き初献介者の介ぞえで手を洗い元の位置にかえる。つづいて祝官が立ち幣籠をとり、西に面して立つ。初献者が立って木主の前に行き坐る。祝官は初献者に従って登り、初献者の右側に西面して跪き、幣籠を初献者に渡す。初献者はこの幣籠を神龕の前にそなえる。

〔進饌〕御膳夫頭座をたつて神厨に入り、進饌の用意をする。専理・典儀・廟司そろって神厨に入り進饌の用意を見

る。奠供者二人、戸外で解剣して壇に登り、左右に分かれて坐る。斎郎者、神厨に入つて饌を奠供者に渡す。奠供者はこれを孔子にそなえる。おわると、東側の奠供者は復聖公・述聖公に、西側の奠供者は守聖公・亜聖公に、さらに、東側の周元公・程正公・邵康節、西側の程純公・張明公・朱文公にそなえる。この時、斎郎は東西二人ずつにわかれ饌を伝える。奠供が終ると専理以下堂に上がり本座に復す。

〔初献〕座が定まると典儀が立つて香を焚き退く。初献介者、盥洗所に入る。初献者は盥洗所に行き、初献介者の介ぞえで手をきよめる。初献者手を拭つて爵盤所へ行く。初献介者もこれに従う。爵盤者は机の上の爵を献官に手渡す。献官はこの爵を拭うて初献介者にあずけ、酒樽所に行き跪いて爵をとり進む。司樽おおいをとり第一儀樽の醴斉をくむ。献官はこれを受けて初献介者に授け、ともに神前に進み、再び献官が爵をとつて跪いて、木主にささげる。初献者が伏拝している間に、初献介者は爵盤所に行き、献官の時のように爵を洗い、酒樽所に行き、醴斉をくんで神前に進む。初献者は神前に坐る。つづいて、祝官が机上の祝板をささげ初献者の左に東面して跪き、祝文を読みあげる。

〔亜献〕座が定まると典儀が立つて香を焚き退く。つづいて、亜献者・亜献介者が盥洗所に進み、初献の時と同様に亜献介者の介ぞえで手をきよめ、爵盤所で爵を拭う。亜献者酒樽所へ行き、跪て爵をとり進む。司樽おおいをとり、第二象樽の益盎をくむ。亜献者はこれを受けて亜献介者に授け、ともに神前に至り木主ならびに四配に献すること初献の場合と同様に行う。

〔終献〕座が定まると典儀が立つて香を焚き退く。つづいて終献者が立ち盥洗し爵を洗う。司樽が酒をくむこと亜献の場合と同様にする。酒は第三疊酒の清酒をくむ。木主ならびに四配に献じ終ると、亜献介者が立つて助奠する。爵

を洗い酒をくむこと前と同様にし、東側にまつる周元公・程正公・邵康節にそなえ、終献介者は同じく西側にまつる程純公・張明公・朱文公にそなえる。これら六位祀の酒はみな第三樽の清酒をくむ。助奠二人の分奠が終わると、二人はもとの座にかえる。終献者は東側の従祀の前に移り各々伏拝し、さらに、西側の従祀に伏拝して座にかえる。

〔受昨〕座が定まると祝官がたつて神前に行き、正座して第三清酒の爵をとり中座に出てこれをささげ跪く。初献官立つて香案の東に北面して跪く。初献介者もこれに従う。祝官立つて献官の右側に跪き、献官に爵を渡す。献官はさらにこれを初献介者に渡す。初献介者はこれを東戸外の卓上におく。祝官再び立つて聖前の蓋をとり、献官・介者へと渡して卓上におく。おわると献官は香案の北で居ずまいを正し、伏拝してもとの座にかえる。なお、この受昨は、藩主が留守の時は省略する。

〔総拝〕当役をはじめこれに参加した諸役人、儒武の師など拝礼する。すなわち、御一門は壇上で、老中以下御手廻頭迄は香台の北で、八組頭以下は香台の南から拝礼する。

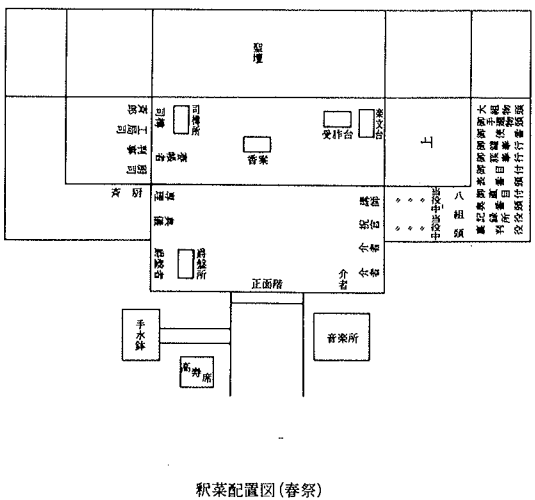
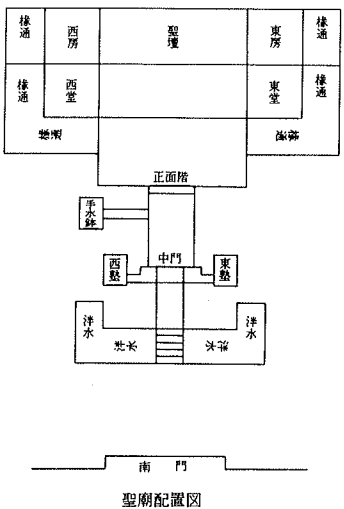
〔徹供〕拝礼が終ると典儀がたつて香を焚く。徹供者二人が戸外で解剣し壇に登る。この際、専理・典儀・廟司は神厨に進み徹供の様子を監視する。徹供者は左右より饌を徹していく。蓋は蓋をおおう。斎郎はこれを受けて下り神廟に入る。まず、正壇の饌を下げたのち、東側の徹供者は東側の配位ならびに従祀の饌を、西側の徹供者は西側の配位ならびに従祀の饌をさげる。下げ終ると専理・典儀・廟司・斎郎等みんな堂に登りもとの座にかえる。

〔講釈〕座が定まると終献介者が立つて見台を東側唐戸の前に設けて退く。講師が座を立つて見台の前に南面して座り、孟子の萬章章句「設為痒序学校」の一節を講釈する。終つてもとの座にかえるのをみて、終献介者が見台をもとの所におさめる。

〔望瘞〕 嘗作主事は瘞坎の力者二人を瘞坎のそばに行かせる。祝官が立って正壇の幣篋を取って壇をおりる。典儀は三献官とともに西方に行く。祝官は幣篋を卓上におき、幣帛を篋から出して力者に渡す。力者はこれを瘞坎に埋める。おわると三献官が立って前堂に行き、北面してもとのように座る。

〔送神〕 祝官が立って東の机上の送神詞をとり、木主の前に進み跪てこれを読む。読みおわると壇をおり香を焚いてもとの席にかえる。献官以下祭者全員が伏拝す。賽帳者が壇に登り帳をおろし、あかりを消してもとの席にかえる。三献官が立って堂をおり、東塾に入る。祭者もまた座をたち式が終る。

枳菜の際の諸官の配置は図に示すとおりであった。<sup>(8)</sup>



## 二 長府敬業館

敬業館は、明和四年（一七六七）毛利匡芳によって長府侍町に建てられた。しかし、枳菜が行われるようになったのは、文化年間（一八〇四〜一八一七）の末、長府第十一代藩主元義の代であった。天保二年（一八三一）になって館の講堂の北に聖廟を設立し、同年八月枳菜を行い、その後恒例となった。明治五年（一八七二）廢館となるに及び聖廟もまた廢止された。<sup>(9)</sup>

敬業館における枳菜の際の諸役は、初献官・亜献官・終献官・祝官（二人）・執篋官（一人）・執樽官（一人）・協律官（一人）・賛唱官（一人）・賛礼官（三人）・執壘官（一人）・享官督（一人）・享官（十人）・掌事官（二人）・賛引官（一人）・楽官（十二人）・監厨（二人）・炊吏（一人）・厨人（二人）であった。<sup>(10)</sup>

これら諸官の役儀は次の通りであった。初献官は「醴ヲ酌テ々神座ノ前ニ進ミ跪テ爵ヲ奠シ」とあるように、神座に爵を献じる役儀であり、亜献官・終献官もまた同様であった。

祝官については、「祝官帳ヲ巻テ香ヲ焼ク」「迎神文ヲ誦ス」「祝文ヲ執テ東嚮シ跪テ之ヲ読ム」「祝官篋ヲ執リ幣ヲ坎ニ入ル」などその仕事に記載されている。すなわち、迎神・送神の詞を誦したり、祝文の奉読、幣を瘞坎におくなど祭儀全般を司った。

執篋官・執樽官のうち執篋官については、「祝官幣ヲ受ケテ篋ヲ整フ、祝官ヲシテ執篋官ヲ兼シムル故ナリ」とあり、篋を司ることを役務とした。また、執樽官については、「執樽官ハ儀樽ノ四幕ヲ披ク」「執樽官醴酒盃酒ヲ儀樽

象樽ニ盛り」とあり、酒樽所を司っていた。

協律官・楽官は、「協律郎献官ノ幣ヲ受ルヲ見テ麾ヲ奉リ」とあり、いわゆる奏楽の指揮者であり、奏楽者である。賛唱官は望瘞の時「賛唱官祝官ニ従ソテ坎所ニ来リ可瘞坎ト唱フ」とあり、また、献官等祭儀がおわり退出したあと、祝執篋執樽執疊が講堂に入りおわると、「賛唱官之(再拜)ヲ唱へ在学諸官皆再拜ス」とあり、坎所ならびに執篋官等の退出の祭に拝礼の指示をすることを役目とした。

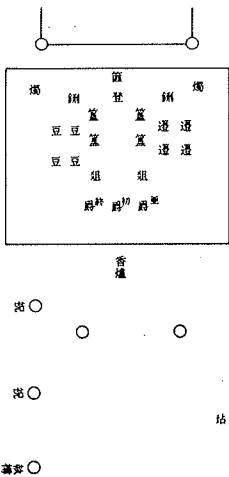
賛礼官は、奉幣の際「賛礼官初献官ヲ引テ」とか初献洗爵の時「首座ノ賛礼官起テ初献官ヲ導キ」とあり、三献官の先導役であり、初献官・亜献官・終献官それぞれに一人づつついていた。

執疊官については、初献洗爵の際「執疊官ハ水ヲ汲テ先ツ其手ヲ洗ハシメ」とあり、いわゆる尊疊を司り、献官洗爵の補助をした。

享官督・享官は、供奠のおり供奠物の進徹を役目とした。

掌事官については、「掌事官廟ニ登リ燈ヲ点シ爐火ヲ埋メ下リテ堂ニ坐シテ諸事ノ整フヲ見テ之ヲ諸官ニ報ス」「掌事官賛礼官享官ヲ引テ其席ニ着シム」と記されている。祭儀が滞ることなくすすむよう諸物の管理と諸官の案内役をつかさどっていた。

監厨・炊吏・厨人は聖厨所を司った。



### 三 積菜の変容(むすびにかえて)

山口県文書館に所蔵されている『教育沿革史草稿』には、藩立学校・支藩学校・家老以下私立学校として二十九の学校が記載されている。これを、積菜の有無について分けると、積菜をおこなっていた学校十五校、積菜をおこなっていない学校八校、不明のもの六校であった。

これら多くの学校でおこなわれていた積菜も、江戸末になるとその運営にかなり変容をきたしてきた。例えば、子六月二十九日の達(元治元年と思われる)によると、

山口学校御祭神御霊社之儀ハ是迄御本式之通毎年仲春於学校御神式御本式被仰付秋祭之儀ハ是迄萩表古館三田尻塾并山口元之博習堂等之祭儀ハ大畧ニ従ヒ神式ヲ以教官之自祭ニ被仰付左之神灵ヲ以御定相成一堂エ合祭被仰付候

菅 丞相

孔 宣父

右之通被相定聖廟之名目ハ向後被差止学校祠堂ト唱被仰付講堂之片端大概是迄之場所ニテ相済候様被仰付候事と記され、神式で菅原道真公と孔子の合祭とし、また、聖廟を学校祠堂ととなえるようになった。

さらに、寅八月二十四日の達(慶応二年と思われる)には「積菜之儀ハ山口萩三田尻三所ニ於テ執行被仰付来候処以来祭式ハ萩聖廟ニ於テ執行被仰付山口三田尻之儀ハ積菜当日神酒計リ相備へ遥拝被仰付候事」ということになった。「学校祠堂」がどうして「聖廟」と再びいうようになったのかは定かでない。寅八月二十五日の小倉尚齊の明倫館創

立百五十年祭の伺に対し、「向後ハ神祭式被差止以前之通儒祭式ニ被差戻候<sup>113</sup>」と違がでており、再び従前の儒祭式へと変更された。

佐波郡右田に時観園という学校がある。寛永五年（一六二八）に創建され、嘉永三年（一八五〇）学文堂とあらため、さらに本教館と改められた。

積菜については、聖廟の中央に孔子の画像をかけ、左右に十哲の木主を配して毎年春秋の二度祭儀を行っていた。しかし、慶応三年（一八六七）学文堂を文教館と改めたさい、積菜もとりやめ神祇祭にきりかえられた<sup>114</sup>。祭神の順次は一に菅原大神、二に天之武日別御統瓊三丘照命、三に国真柱石上振魂雄健命、四に秋津彦美豆桜根大人、五に孔子神と孔子を第五位の位置に定めた。菅原道真を第一においたのは、「元来菅家は江家と御同祖」であるうえ「丞相ニ御登被成後には贈大政大臣にも被成御成」たのであるから「筆頭は当然之儀」であるとした。孔子を第五位にいたことについては、次のようにその理由を述べている。

孔子を終りニ置候儀愚昧偏僻之学者より見候時は決而疑を生し議論杯も可仕候得共此處別而皇国之躰を張候肝要之儀ニ御座候其故は孔子文徳ハ有之候共其身元来外国之人ニて祭之もまた外蕃之神を祭り候儀に候得は神国古今之神靈より上に可置道理ハ全無之候

さらに、「学校中之御祭事は迄積奠積菜等之名目被差除向後学校祭と相唱候様被仰付候事」として、積奠積菜から学校祭へと変更された。

揺れ動く社会の中にあつて、その精神的なよりどころとして続いてきた積菜も当然のことながら変容を余儀なくされていくこととなったのである。

註(1)『近世の学校』（石川謙）

- (2) 『春秋積菜』（山口県文書館 文武一〇六）
- (3) 『山口県教育史』（山口県教育会編）
- (4) 『明倫館御書付類控』（山口県文書館 文武七二）
- (5) 『山口県教育史上』（山口県教育会）
- (6) 『明倫館御遷座御祭事控』（山口県文書館 県史八三三）
- (7) 『春秋積菜』（山口県文書館 文武一〇六）
- (8) 『明倫館積菜記録』（山口県文書館 諸省六）
- (9) 『教育沿革史草稿 藩立学校』（山口県文書館 県庁戦前 A 四九）
- (10) 『積奠考』（山口県文書館 県史四八八）
- (11)(12)(13) 『教育沿革史草稿』（山口県文書館 県庁戦前 A 四八 ~ 五〇）
- (14) 『本教館学規功令及祭儀』（山口県文書館 県史八二二）